

査読論文

日本の華人キリスト者の生態をめぐる一考察 —超教会的ミッション活動への取り組みを通じて—

モリ カイネイ*

要旨

本稿は日本の華人キリスト者を研究するため、特に近年彼らの間で起きている、超教会的団体「JCC」によるミッション活動を考察する。これまでの華人社会の宗教を巡る研究は、「チャイニーズネス」の増減問題を自明な前提としていたが、本稿はそのような手法がプロテスタンティズムに適合しないと指摘したうえ、人々が積極的にミッション活動に取り組むことを取り上げて、従来の華人研究における「チャイニーズネス」を軸とする視点への反省を試みる。具体的には、先行研究を踏まえたうえ、日本の華人キリスト者たちが集まる教会の孤立化が顕著であると確認した一方、2012年から活動を開始した超教会的団体「JCC」を事例に取り上げ、その活動の内容、組織の構成、創設者の問題意識、参加者たちの動機と感想、及び「JCC」と一定の距離を置いたほかの華人教会指導者による意見をそれぞれ考察した。そこで、「JCC」が日本の華人キリスト者たちに、プロテスタンティズムの世界ミッションを巡る新しい世界観を紹介し、さらにミッション活動を実践することでそれを実感させていることが分かった。それらのような経験は、華人キリスト者たちが非本質主義的な主体を形成するための基盤となっている。そのため、華人キリスト者を巡る研究は、ただ新しいサブジャンルを切り開いただけでなく、華人研究のパラダイムの更新をもたらす可能性もあると考えられる。

キーワード

華人、プロテスタンティズム、ミッション、超教会的団体、チャイニーズネス

1 問題の所在

本稿では、中国に出自を持つ、華僑華人としての移住者・移動者の社会において、キリスト信仰とりわけプロテスタンティズムを受容した人々のことを「華人キリスト者」と呼びたい。日本では、華人キリスト者は主に戦後になってから現れてきた。しかし、膨大なネットワークを形成した華人も、プロテスタンティズムによるミッション活動も、いずれも世界規模で論じられている重要なカテゴリーであり、また今日いわゆるグローバルイゼーションやトランスナショナルイゼーションなどが急速に展開しているにもかかわらず、この二つが交差する領域にあ

* 執筆者：モリ カイネイ

所属：職位：立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程

E-mail: sealand196792@gmail.com

たる「華人キリスト者」は、これまで特に注目されてこなかった。本稿は以下のような背景を踏まえたうえで、近年の日本における華人キリスト者たちの動向を記述する試みを通じて、彼らを認識するための新しい枠組みを提示する。

日本の華僑華人をめぐる研究には蓄積がある。その研究潮流は、華僑華人の経済活動を対象とする経済学的研究と、アイデンティティの変容への考察を中心とする人類学・社会学的研究に大別できる。後者については近年、特に日本社会との関係性や民族文化の再編などが新しい視点と見なされている¹。そのなかで王(2001)と張(2004)の研究は、数少ない「華人社会の宗教」に関連する研究である。いずれの研究も伝統的な祭祀や中華街の関帝廟などの事例に基づき、華僑華人の文化と日本社会との交渉を考察したものである。他方、藤井(2001)は日本における台湾系仏教団体の「社会的形態」を取り上げて、それらの団体の世界的伝播の基礎は、エスニック・コミュニティの維持と強く結びつくところにあると指摘した。ここで注目すべきなのは、事例として取り上げられた仏教関連のことや関羽信仰などは中国社会発祥のもの²であり、なお日本で起きた変容もそれら中国に由来した性質から大きく離れていないことである。即ち、これらの研究の目的は、華人社会の宗教を経由して華人の「文化」変容を実証するものである。その変化とは、発祥地である中国社会を「基準」として、日本の華人社会の現実との違いに由来するものである。こうした変化への関心は、華人研究における「チャイニーズネス(Chineseness)」をめぐる問題意識によるものである。長い歴史を持つ「中国」の一貫性を象徴する「チャイニーズネス」は、中国本土と華人社会との同質性の根拠として想定されている³。華人社会における仏教や民間信仰などは中国に出自を持つため、それらを対象とする研究は「チャイニーズネス」を内包した媒体への研究として捉えられることができる。しかし、プロテスタントの場合、そのルーツを中国社会に遡ることはできず、信仰の内容も漢民族的な文化的伝統に依拠しないため、上記のような視点は適用できない。日本に限らず、このような非伝統的な宗教であるという点が、今日の華人研究におけるプロテスタント関連研究が少ない重要な原因としては十分考えられる。

これまでの華人社会のプロテスタント、とりわけ華人キリスト者に関する研究は、19世紀初頭から20世紀前半までの歴史研究と、近年の実態への考察という二つに分けられる。歴史的にみると、華人キリスト者はプロテスタントの中国宣教という大きなビジョンの準備段階から出現してきた。その後、中国人キリスト者の海外移住と、華人社会を対象とするミッション活動が元になって、国共内戦後の中国から脱出した人間及び教会関連の様々な資源との合流を経て、中国のキリスト者と異なる独自の文脈が形成されてきた⁴。ただし、1960年代頃から華人キリスト者たちが西洋人宣教師からコミュニティの運営やミッション活動の実施などの主導権を取得した後の歴史は、彼らが西洋人宣教師のように歴史記録の保存作業を重視しないため、文書記録によって辿ることが困難となり、20世紀半ばまでの歴史と現状との間に研究上の断層が生じた⁵。

他方で1990年代頃からは、人類学・社会学的手法による華人キリスト者研究がいくつか実施された。代表的な研究は、Yang (1999) である。Yang はアメリカにおける移民社会研究の枠組みから華人キリスト者の自己認識を論じた。彼は、華人キリスト者の自己認識を「チャイニーズネス」に相当する部分と、プロテスタンティズム、特に保守的な福音主義的立場に相当する部分との組み合わせとして捉え、その組み合わせによりパターン化した。Shen (2010) はドイツの事例を対象とし、「チャイニーズネス」よりもトランスナショナルなキリスト教ミッション活動に関心を向けた⁶。ミッション活動に取り組むことは、仏教や民間信仰などのように「チャイニーズネス」の範疇内に含まれない。しかし一方で、従来の華人研究の主要な問題意識は、「チャイニーズネス」の増減問題を軸にしている⁷。たとえば、一人の人間がたまたま中国出身の先祖を持つとすれば、それだけで「華人」のカテゴリーに分類されて、その身に「チャイニーズネス」がどれくらいあるのかを巡って議論が始まるであろう。しかしその人間が持つ、中国的ではないほかの自己認識は、このような思考のもとでは単独的に評価されない⁸。そのため、「チャイニーズネス」ではなく、キリスト教ミッションへの取り組みに基づいて華人キリスト者に注目することは、これまでの華人研究のパラダイムを再考する視座を導出する可能性を持っている。

上記の背景を踏まえたくて改めて日本に注目すると、これまで華人キリスト者を対象とする研究は、成瀬 (2005) と Mori (2014) の二つしかない。いずれも日本の華人キリスト者の歴史や活動内容の概況について貢献していることは疑いえない。成瀬 (2005) は大阪地域の華人教会の変遷 (1949~2005) と構成を中心に考察したものの、あくまでエスニック・コミュニティという文脈を前提とした研究であった。Mori (2014) は2009年から2011年までの調査を基に関東と関西の両方から華人教会の事例を取り上げて、運営方針の比較により、移民たちが自ら結成した「エスニック志向」の教会と、1990年代以降来日した華人宣教師たちが設立した「ミッション活動志向」の教会との二種類に分けて論じた。教会組織をエスニック・コミュニティとして維持することをミッションの実践より優先させる「エスニック志向」に対して、「ミッション活動志向」の教会に集まる華人キリスト者たちは宣教師たちの指導の下で、ミッションの実践に資源を集中すると同時に、エスニックな要素を信仰コミュニティの維持要件としないという状況が現れている。この論述を前述したYang と Shenの分析と対照すれば、「チャイニーズネス」関連の視点以外、同じくミッション活動に取り組むことの重要性が強調された。さらにYangの研究にはプロテスタンティズムがホスト社会の背景であるという前提があり、Shenはドイツ社会の背景に触れていないが、対象者たちの信仰の受容とホスト社会とは完全に無関係だと考えにくい。一方、日本社会ではプロテスタンティズムは主流ではなく、日常においては特に強い影響力があるわけではない。華人キリスト者の活動の動機を巡って、欧米社会のような、ホスト社会からの要請が存在しない⁹。そのため、日本における華人キリスト者の研究は、欧米社会には見られない新たな側面を発見する機会を提供する可能性が高いと予想

できる。

以上の論述を踏まえて、本稿は Mori (2014) に引き続き、日本の華人キリスト者の社会を対象に、2011年から2015年まで行われたフィールドワークについて整理する。まさにこの期間にふくまれる2012年から、関東の華人キリスト者の間に新しい変化が起きている。詳細は後述するが、かつて相互間の交流が少なく、様々なミッション活動の実施も各自別個に行われていた状況の中で、一人の新参の韓国人宣教師が新たな団体を立ち上げて、超教会的な連携を目指す積極的な活動を展開しはじめた。本稿はまず日本の華人キリスト者の事情について改めて整理したうえで、この宣教師による活動の内容や影響などを明らかにし、華人キリスト者という存在を巡るまだ数少ない記述を増加することを試み、研究意義の析出に寄与することを目的とする。

2 日本の華人キリスト者の概要

東南アジア及び北米のような伝統的な集中地域と比べると、日本の華人キリスト者の歴史は長くなく、特に規模は極めて小さい¹⁰。なお教会関連の記録にも学術的研究にも、その全体的な状況についての記述は未だ存在しない。本稿は独自の調査をもとに、日本の華人キリスト者たちが集まる教会の情報を整理した。限界があることは認めつつも、以下の通り、この研究において有益なデータとして使用できる。

日本における華人キリスト者の集まり一覧(2015年10月現在)

教会名	所在地	特注事項
札幌国際キリスト教会	北海道札幌市	中国語単独礼拝あり
東京中華基督教会	東京都杉並区	
東京国際基督教会	東京都渋谷区	
東京陽光基督教会	東京都荒川区	
東京台湾教会	東京都杉並区	日本台湾長老教会連合に加入
池袋台湾教会	東京都豊島区	日本台湾長老教会連合に加入
高田馬場台湾教会	東京都豊島区	日本台湾長老教会連合に加入
新橋基督教会	東京都中央区	東京国際基督教会より独立
北千住国際福音教会	東京都足立区	基督教国際福音教団傘下
山手台福基督教会	東京都北区	
東京日暮里国際教会	東京都荒川区	
東京靈糧基督教会	東京都新宿区	
東京亀有生命団契	東京都葛飾区	日本華僑基督教団傘下
東京大久保国際教会	東京都新宿区	中国語単独礼拝あり
淀橋教会	東京都新宿区	中国語単独礼拝あり
新宿シャーロム教会	東京都新宿区	中国語単独礼拝あり
純福音東京教会	東京都新宿区	中国語単独礼拝あり
横浜華僑基督教会	神奈川県横浜市	

教会名	所在地	特注事項
神奈川県国際福音教会	神奈川県横浜市	基督教国際福音教団傘下
千葉台湾教会	千葉県千葉市	日本台湾長老教会連合に加入
千葉国際福音教会	千葉県市川市	基督教国際福音教団傘下
埼玉国際福音教会	埼玉県川口市	基督教国際福音教団傘下
台湾基督教会川越教会	埼玉県川越市	日本台湾長老教会連合に加入
筑波国際基督教会	茨城県つくば市	東京国際基督教会の分教会
筑波福音基督教会	茨城県つくば市	筑波国際基督教会より分離
名古屋華人之家	愛知県名古屋市	
名古屋基督教生命堂	愛知県名古屋市	日本華僑基督教団傘下
京都華人之家	京都府京都市	名古屋華人之家の分教会
国際チャーロムキリスト教会	京都府宇治市	中国語通訳あり
大阪中華基督教長老教会	大阪府大阪市	日本台湾長老教会連合に加入
大阪台湾長老教会	大阪府大阪市	日本台湾長老教会連合に加入
大阪中華福音教会	大阪府大阪市	
大阪基督教生命堂	大阪府大阪市	日本華僑基督教団傘下
伯特利之家（ベテルの家）	大阪府八尾市	
堺市中華基督教会	大阪府堺市	
神戸改革宗長老教会	兵庫県神戸市	
関西華僑基督教会	兵庫県神戸市	
神戸基督教生命堂	兵庫県神戸市	日本華僑基督教団より分離
岡山生命団契	岡山県倉敷市	日本華僑基督教団傘下
福山生命団契	広島県福山市	日本華僑基督教団傘下
広島基督教生命堂	広島県東広島市	日本華僑基督教団傘下
福岡新生キリスト教会	福岡県福岡市	中国語単独礼拝あり
福岡錫安（シオン）華人基督教会	福岡県福岡市	

（筆者の調査より作成^{11）}

この表にある通り、華人キリスト者が集まる教会は主に関東と関西に集中する傾向があり、かつ半分以上は関東にある。そのうち、東京台湾教会のみは1925年、台湾出身学生の祈祷会まで遡るが、それ以外はすべて戦後の設立である。なお東京中華基督教会、東京国際基督教会、横浜華僑基督教会、神戸改革宗長老教会、関西華僑基督教会、大阪中華基督教長老教会は1960年代まで、中国系ニューカマーまたは中国から撤退した欧米人宣教師によって設立された教会である。大阪台湾長老教会を除いて、教会名に「台湾」と明記したのはすべて東京台湾教会の関係者による創設である。それ以外の教会は大抵1990年代以降、既存の教会による設立か、教会の分裂によるものか、海外から新たに来日した宣教師たちが設立したか、という3つのパターンに分かれている。ただし、前の2種の場合でも、基本は海外特に北米の教会やミッション団体などから牧師を招聘することや、様々な援助や指導を受けることで新しい教会が設立されたため、日本社会および日本のプロテスタントとの関係性は薄い。

なおここで特筆すべきなのは、「中国語単独礼拝あり」と注記された6つの教会である。これらの教会は華人による、あるいは華人のために設立された教会ではないが、華人及び中国語話者のグループが教会内に存在し、通常の礼拝とは別に中国語礼拝が単独で設けられている。

これらの教会の中、淀橋教会と福岡新生キリスト教会は古い教会である¹²。大久保国際教会と純福音教会に韓国系の背景がある。新宿シャーロム教会は日系アメリカ人宣教師によるミッション活動の成果であり、札幌国際キリスト教会はアジアで活動する「国際福音宣教会¹³ (Overseas Missionary Fellowship, 以下: OMF)」所属の韓国人宣教師が設立したものである。いずれも非信者への伝道など様々なミッション活動に積極的に取り組んでいる教会である。中国語礼拝グループができたきっかけはそれぞれ違うが、中国語話者向けの伝道を行うべきというビジョンを持っていることが、各教会間の共通項になっている。

一方、それら以外の教会の中では、上記の6つの教会のように積極的にミッション活動に取り組む教会もあるが、同じく華人キリスト者の教会であっても相互間の交流や連携が少なく、ミッション活動を巡る協力などもあまり見られない。ほとんどの教会は単立の宗教法人として届け出しており、毎週の礼拝や祈祷会、聖書勉強会、年齢や性別で結成された各グループの活動、洗礼式、クリスマスなどの行事をすべて独自に行っている¹⁴。違う教会の間では、一部の会衆の個人的な繋がりがあり、また引越しなどによる転入・転出のようなこともあるが、教会全体としては「某所に某華人教会がある」という程度の認識しか持たないのがほとんどであった。唯一比較的に例外なのは、東京台湾教会をはじめとする7つの教会が、組織の運営から神学的立場まで同じく台湾基督長老教会の流れを引き継いでおり、かつ説教の一部において台湾語の使用を維持していることにより、「日本台湾長老教会連合¹⁵」という名義で相互間の協力関係を再確認している。ただし、具体的な協力内容は、牧師の転任や海外から来日する台湾基督長老教会関連の訪問者の招待などに限られているようで、教会の運営層のみで対処する事務が多いため、一般会衆の間に深く浸透していない。

実際、日本の華人キリスト者の間ではこれまでずっとこの状態が続いたわけではない。少なくとも1980年代の頃、一時期教会の壁を越えて共に非信者への伝道などに取り組もうという動向があった。その背景になったのは、1976年から結成された「世界華人福音運動¹⁶ (以下: 華福運動)」である。1950年代半ば以降、英米を中心に広がった福音主義運動の影響により、一部の華人教会指導者たちが華人キリスト者のトランスナショナルな繋がりを構築しようとしたため、「華人教會、天下一心、廣傳福音、直到主臨 (華人教会は一致団結し、キリストの再臨まで福音を述べ伝えよう)」というモットーを提唱し、ミッション活動の実践の必要性和緊迫性を世界中の華人キリスト者たちに呼びかけている。当時、東京国際基督教会の創設メンバーの一人、教会の長老でもある丁惟柔が金主¹⁷の一人として2007年の逝去まで、この運動の財務委員会の主席を30年以上担当していた。そのため、東京国際基督教会が日本における華福運動の連絡先になっており、教会の運営層を中心に「華福日本区委員会」が設立された。1970年代末から1980年代の頃、「華福日本区委員会」の企画により、ほかの華人キリスト者の教会とともに大型の伝道集会や連合祈祷会、合宿キャンプなど多くの合同イベントを行った。しかし、1990年代に入ってからこのような企画がなされなくなってきた。最近十数年間、東南アジアや

北米の華人キリスト者たちによる多様なミッション活動の活発化に対し、日本では東京国際基督教教会のような従来の集まりはミッション活動に関して、ほとんどが活動停止状態になっている。2007年以降、華福運動の事務局から、「華福日本区委員会」に対して活動の再開やトランスナショナルな伝道活動への協力などを要請・催促したが、その大半は様々な理由で断られたといわれる¹⁸。

以上、日本の華人キリスト者の事情とりわけ彼らが集まる教会について概観した。個別の教会内の活動はともかく、教会を越える連携関係や行事・イベントの合同活動はなく、各教会は極めて独立的ないし孤立的な状態にあるように見受けられる。これから、このような背景を踏まえたうえで、2012年より現れた超教會的な団体、教会を越えてミッション活動に取り組もうとする「JCC」のことを取り上げて考察する。

3 超教會的団体「JCC」の登場

前章で述べたように、日本の華人キリスト者が集まる各教会間の繋がりは極めて弱い。かつて一時期、ミッション活動を巡る連携などがあったものの、今はほぼ見られない。しかし、このような静止した状態は2012年から大きく変わり始めた。その主役となったのは、パク・スミン（朴 樹民）という韓国人宣教師及び彼の指導下で創設された「日本華人基督徒中心（**Japan Chinese Christian Center** / 在日華人クリスチャンセンター、以下：**JCC**）」である¹⁹。

パク氏はソウル大学の中国語学科出身、北京での留学中、中国のプロテスタンティズムの凄まじい成長に深い感動を覚えた。修士課程を修了した後、ソウルの教会で中国人学生向けの伝道活動に従事しながら神学校に通った。のちに牧師の資格を得て、2004年から **OMF** の外部協力宣教師として札幌国際キリスト教会に着任し、中国語礼拝グループの担当者になった。2011年、パク氏は活動の拠点を東京に移し、約20人規模の「東京日暮里国際教会」を設立した。それから彼は教会の日常的運営をしながら、熱心な華人キリスト者を集めて連合祈祷会などを行い、「在日華人²⁰」に伝道したいという自身のビジョンを積極的に紹介していた。2012年6月より、彼はそのビジョンに賛同する数人の華人キリスト者ととも、「在日華人」向けのミッション活動を巡る教育、宣伝、仲介、実践などの業務に特化した新しい団体を立ち上げることに合意した。8月、彼らは最初のテストとしてアメリカから有名な大衆伝道家を招いて小規模の伝道集会を行った。11月、正式にスタッフ会議を結成し、**JCC** という名称を名乗って活動をスタートした。

本来、パク氏は主要な華人教会指導者たちとの協力関係を期待していた。だが、実際彼の構想を歓迎した教会は一つもなかったらしい。同じく近年来日した宣教師が設立した教会のいくつかは、すでに独自のミッション活動を展開している以上、資源の不足などの問題によって彼の構想を積極的に支持する余裕がないという表面的な説明の裏には、大半の教会の当初からの

拒絶があった。そのため、JCCの運営は完全にパク氏の頭脳と賛同者たちの実践に基づいていると言えよう。

JCCの主要な活動一覧(2015年9月現在)

日時	イベント
2013年5月11~12日	2013年日本華人伝道大会(米より講演者が来日)
2013年10月8~10日	マレーシアのメソジスト教会よりミッション交流ツアーが来日
2013年11月1~2日	信仰育成講座(カナダより講演者が来日)
2014年1月6~11日	タイ北部の国民党系残留軍人の村にて短期宣教活動
2014年2月5~8日	濟州島にて第4回東アジアキリスト教青年大会に参加
2014年5月3~5日	日光にて信仰育成講座の合宿(米より講演者が来日)
2014年5月24~25日	2014年(春期)日本華人伝道大会(米より講演者が来日)
2014年6月25~29日	マレーシアより短期宣教ツアーが来日(音楽伝道会 & 伝道講座)
2014年8月22~24日	アメリカより「賛美之泉」伝道チームが来日(音楽伝道会)
2014年9月14日	「Holistic Health」特別伝道大会(米より講演者が来日)
2014年10月11日	第1回JCC信徒伝道者養成講座
2014年10月18~19日	2014年(秋期)日本華人伝道大会(米より講演者が来日)
2014年11月2日	シンガポールより「愛心歌社」伝道チームが来日(音楽伝道会)
2014年12月15日	第2回JCC信徒伝道者養成講座
2015年1月3~5日	第3回JCC信徒伝道者養成講座
2015年2月4~7日	濟州島にて第5回東アジアキリスト教青年大会に参加
2015年3月28日	第4回JCC信徒伝道者養成講座
2015年5月4~5日	第5回JCC信徒伝道者養成講座
2015年5月16~17日	2015年(春期)日本華人伝道大会(米より講演者が来日)
2015年6月27日	第6回JCC信徒伝道者養成講座
2015年7月5日	アメリカより「賛美之泉」伝道チームが来日(音楽伝道会)
2015年7月11日	第7回JCC信徒伝道者養成講座
2015年8月29日	第8回JCC信徒伝道者養成講座
2015年8月28~30日	マレーシアより「Life Game」伝道チームが来日(ゲーム伝道)

(JCCの情報提供より作成²¹⁾)

通常の教会の場合、毎週の礼拝に祈祷会や聖書勉強会などを加えて、信者に宗教的な要素を提供することにより、個々の人の日常を構築している。それに対し、JCCの活動の目的は個人の日常ではなく、ミッション活動の推進にある。この一覧表からわかるように、およそ半分は伝道大会など非信者への伝道活動であり、ほかの信徒伝道者養成講座やミッション関連の交流・体験活動は一般信者を対象とするものである。これで、パク氏がミッション活動の推進を巡って、日本の華人キリスト者たちが集まる教会が提供していない概念、思考、訓練などを補完することを念頭に置いて行動していると読み取れる。なお、パク氏は「母語に基づく理解」という観点に拘る傾向があり、中国語話者に対して通訳経由ではなく中国語のままの情報を伝えるべきと強く主張している。そのため、イベントの企画に際して、主にアメリカやカナダなどから中国または台湾出身の移民1世の伝道者を招いている。特にJCC信徒伝道者養成講座など一部の活動ではSkypeなどを用いて、世界中様々なところにいる中国語話者である伝道

者たちから受信している。

なお前述したように、パク氏はほかの華人系教会からの協力を得られず、各イベントの企画から実行まですべて十数人の賛同者たちとともにを行っている。そのため、彼らは平均2週に一度スタッフ会議を開き、イベントの準備作業などに取り組んでいる。パク氏は、2015年度に入ってから、このスタッフ会議はすでに自主的に運営できるようになったため、今後はさらに正規な神学教育を受けさせれば、具体的な事務だけでなくよりハイレベルの判断力を身に付けるようになるると自分は完全に退いても大丈夫だろうと説明した。

なお、JCCのスタッフ会議は非常にオープンであり、構成メンバーは固定されない。たとえイベントの準備作業の途中から参加した新人であっても、すぐ役割を分配されたり、意見を求められたりする。ただし知識と経験に関しては、パク氏は絶対的に優位なため、多くの場合彼の見解が権威のある決定として受け入れられる。2015年9月現在、スタッフ会議のメンバーはすでに約40人まで増加した。そのうち、8割以上は首都圏内の十数か所の教会に各自在籍している。一番多いのは東京国際基督教会から約十人である。さらに前章で整理した教会リストにはなく中国語礼拝のない教会からの参加者も少なくない。従来、華人による、または華人のための教会以外に分散している華人キリスト者の状況は把握できないが、そのような人たちの参加により、JCCはほかの教会や団体より優れた情報掌握が可能になった。スタッフ会議の一人によると、大型の伝道大会などの場合、JCCはすでに約200人前後の臨時スタッフを動員できるようになった。

一方、パク氏はJCCの宗教法人申請を念頭に置いて、将来の理事会という意味合いでスタッフ会議の中からさらに7人のコアメンバーを選定し、彼らに運営上の表決権があることを決めた。その内訳は中国出身の男性1人と女性2人、香港出身の女性1人、台湾出身の女性1人、及びマレーシア出身の男性2人である。年齢は30代前半から50代半ばまで、職業は会社員または実業家である。選定の理由は明らかにされていないが、会社経営者としてのリーダーシップ、国際貿易に従事したことによる交渉力、幼少時から宗教教育を受けてかつ華人キリスト者のネットワークに詳しいといった経験などが選定された最も重要な原因であると推測できる。

パク氏個人の内面的な部分については検討しようがないが、JCCの設立と運営から伺えるように、彼はまさに「ミッション活動を巡る教会間の連携」というスタイルの関係性を、それを持たない日本の華人キリスト者の間に持ち込もうとしている。その構想が既存の教会に支持されなくてもかかわらず、一般信者の中から賛同者を得て独自の展開を遂げつつある。これから、彼の活動に対する反応について、その活動に取り組む人々と、距離を置くほかの華人教会指導者たちという両方から考察することにより、日本の華人キリスト者の間におけるJCCの役割と影響を検討する。

4 JCC を巡る参加者たちの反応

パク氏は一人の韓国人宣教師として、伝道のために日本にやってきて、「在日華人」を対象として、「教会を越える」ミッション活動を展開している。今日の韓国はプロテスタンティズムの海外宣教師派遣において、アメリカに次いで世界2番目の規模を有している。日本においても、韓国系背景を持つ教会の増加も周知の事実である²²。このような背景のもとで設立されたJCCは大量のイベントの開催及び急速な展開をもって、それまでの日本の華人キリスト者の世界、とりわけ彼らが集まる教会にも個々の個人にも一定の衝撃を与えていると考えて良いだろう。前章ではJCCの概況を整理したが、本章ではJCCの関係者たちを対象に行ったインタビュー調査を取り上げ、JCCとの関わりについて各自の動機と感想を中心にみていく。そこからJCCが得ている支持の意味を析出する。

発足当初のJCCが各教会からの支持を得られなかったため、パク氏の賛同者たちはそれでも友好的な態度を示した教会でイベント開催の情報を紹介するほか、主に個人の人間関係及びネット発信を基に宣伝していた。さらに2013年の伝道大会が大成功を収め、日本、台湾、シンガポールなどの多くのミッション系新聞や情報サイトがそれを報道した。そのため、イベントのみに参加した人やスタッフ会議の議事にも参加した人を問わず、最初はネットでJCCのことを知り、さらに知人同士で情報を確かめ合ううちにイベントに行ってみようと思ったケースは極めて多い。それで複数回参加したら、「キリスト者なら手伝いに来てくれないか」と誘われたりする。そのまま積極的にJCCの活動に取り組むようになった人がいれば、個人の都合で参加のみに止まっている人もいる。

具体的な調査はコアメンバーをはじめとする数人の関係者との親睦関係を構築したうえ、彼らの協力を得て実施した。2013年3月から2015年9月までの間、JCCのスタッフ会議、平日の祈禱会、伝道大会およびその他のイベントに計15回参加した。本章で取り上げる事例へのインタビュー調査は、それらの集会やイベントの前後、懇親会、もしくは対象者が所属する教会での礼拝後に行われたものである。対象者の選定は、JCCに積極的に取り組んでいること、もしくはJCCのイベントを評価しかつ複数回参加したことがあることを基準とした。具体的な内容は、「JCCへの印象/感想またはJCCに関わるきっかけ」という半構造化インタビュー調査と並行して、個人の信仰経験を中心とする非構造化インタビュー調査も含まれている。その結果の要点を以下のように整理できる。

対象	性別	年齢	出身	職業	滞在歴	信仰歴
A	女性	20代	中国	会社員	7年	5年
B	男性	20代	マレーシア	学生	2年	20年
C	男性	30代	中国	会社員	8年	4年
D	女性	30代	中国	会社員	5年	4年

対象	性別	年齢	出身	職業	滞在歴	信仰歴
E	女性	60代	中国	主婦	18年	12年
F	女性	50代	マレーシア	経営者	18年	37年
G	女性	20代	中国	会社員	5年	4年
H	男性	40代	中国	経営者	25年	23年
I	女性	30代	台湾	学生	7年	7年
J	男性	20代	台湾	学生	2年	7年
K	女性	40代	中国	主婦	6年	9年

JCC のイベントないしスタッフ会議に参加する動機について、似たような回答で一番多いのは A, C, D, E, G, I の 6 人であり、いずれも気楽な態度が示されている。最初のきっかけは、「よく覚えていないが、とにかく何かあるみたいで行ってみた (D, E, I)」、「教会の知人に誘われたので付き合った (A, C)」、「微信²³のグループの中で呼びかけを見かけた (G)」など、極めて偶発的かつ曖昧な理由ばかりだった。

6 人の中、A, D, E, I は 2013 年の伝道大会から、C と G は毎週行われる連合祈祷会から、それぞれ JCC に関わるようになった。A, D, I にとって、2013 年の伝道大会が彼女たちに強い印象を与えた。D の感想はかなり代表的だと考えられる。

このようなイベントは初めてなので、いろいろよくわかりませんが、とにかくよかったですと思います。讚美歌はすごくよかったです。うちの教会の讚美歌とは違って、すべてあの歌手の自作だと聞きましたが、毎週の礼拝でああいう歌で賛美できれば、この大会のように賑やかであればいいなと思います。そのあとスタッフだった一人にそう言ったら、あなたも JCC に来ないかと誘われました。(2013 年 7 月 28 日)

また C と G は大型のイベントではなく、平日の JCC の祈祷会に数回参加していたら、ごく自然にスタッフ会議の議論に加えられるようになり、だんだん常連の一員になった。C はこう述べる。

最初は、私は同じ教会の〇〇さんと一緒に行きました。祈祷会の場所も便利だから、その後も時々顔を出しました。たまにスタッフ会議に出席したら、その雰囲気がうちの教会より良いと思いました。かなり民主主義的でちゃんと議決も行われます。うちの教会は老人ばかりで、何かを議論する時、彼らはいつも「聖書に民主主義なんて書いていない」と言っていて、なんでも自分たちだけで決めちゃいます。私は彼らのやり方が間違っているというつもりはありません。最終的に聖書に反しなければいいです。でも、JCC は若い人が多いし、一人一人の発言が尊重されています。だから私はよく行きますし、何か手伝えることはないかと思っていたら、私にも担当業務が回されました。(2014 年 4 月 27 日)

Cの感想は多少雑だが、Dの感想とほぼ同じく、即ち各自の所属教会では提供されないものを求めてJCCに関わるようになった。その具体的な内容は、パク氏が期待したミッション活動への関心とは違い、はっきりとした宗教的なものというより、感覚的・慣習的なものである。それ以外の「とにかく楽しいし、お祭りみたい(A)」、「みんないい人だし、一緒に作業するのが楽しい(G)」、「深く考えていないが、主の導きだろう(I)」などの回答も大抵この範疇から離れていない。

なお、A、C、D、G、Iに共通的な特徴があると考えられる。即ち全員、日本での滞在期間も信仰期間も一桁にすぎず、なおかつ来日してから洗礼を受けたのである。ライフスタイルが未確定な大学院生のIを除いて、A、C、D、Gはいずれも日本の大学または大学院を出て、就職してから間もない。言い換えれば、みんな人生の転換期にいるため、アイデンティティの構成も不安定な状態であるかもしれない。彼女たちはキリスト者という身分認定を持っているが、受洗してから長い時間が経っておらず、必ずしもキリスト信仰の深い部分への理解や体験が進んでいない。そのため、「祭り」のような賑やかさがあり、人間関係などにおいて居心地が良いJCCという場所は、彼女たちにとっては各自のライフスタイルの構築に際して重要な意義があると言えよう。

一方、一番年長のEはJCCの活動に積極的に参加しているが、その動機について、パク氏個人への尊敬を強調している。

彼は韓国人なのに、魂を救うために中国に行ってからまた日本に来て、まごころをもって中国人に奉仕するなんて、誰にでもできることではありません。とても偉大な方だと思いませんか？せっかく彼が火を付けてくれたから、私たちも自分自身のできることからしないと。(2014年4月27日)

いずれにせよ、ミッション関連の様々な活動に積極的に取り組むJCCは、ミッション活動への取り組みの意義より、そこに纏わる雰囲気や象徴が、A、C、D、E、G、Iを魅了した。JCCはミッション活動の推進という特殊な目的を有する団体として、毎週の礼拝など行事を取り扱う教会とは役割が違うはずである。しかし少なくとも信仰期間が短い人にとって、礼拝も伝道イベントの準備も同じく「キリスト者がすべきこと」である点のみに注目する場合、たとえ礼拝に出席することと伝道イベントの作業に参加することに何の矛盾もなくとも、感情的に気楽で楽しそうな側に傾ける可能性は大きい。即ち、年齢も信仰経験も若い人々を中心に、JCCが更なる展開を遂げることが考えられる。

そのような直感的に行動する大多数に対し、HとKの2人がJCCに関わる動機は、極めて

真剣である。二人の出身や信仰経験などはそれぞれだが、信仰が非常に敬虔であることが共通な特徴である。

Hの日本滞在期間は調査対象者の中では一番長い。官費留学生として来日し、名門大学を卒業した後、大手企業での勤務を経て自分の貿易会社を立ち上げた。普段は海外渡航などで多忙なため、所属教会の日曜礼拝に参加できないことが多い。しかし一方、国際貿易に従事しているため、同じくキリスト者であるビジネスマンの知人が多く、海外の教会やミッション団体などの事情にも詳しい。JCCのようなミッション活動に特化した団体のこと及びパク氏の運営の手法について、特に珍しく考えていないようである。ただし、JCCの信徒伝道者養成講座を高く評価している。なお、非信者への伝道活動について、主要な華人系教会の無作為を厳しく批判している。

時代が変わりました。昔は牧師たちが引っ張っていましたが、これからはキリスト者一人一人が、自分自身の職場と周辺の地域からスタートして、積極的に福音を述べ伝えるべきです。私は、カナダの華人系教会でそのような講座を少し受講したことがあります。そのような専門的な学校もあるようですが、なかなか余裕がありませんね。だからパク先生がやっていることはえらいですよ。ああいう訓練は今の華人キリスト者たちに必要ですよ。どこかの陰に隠れて鎖国している連中とは違って、パク先生こそイエス様の真の弟子ですよ。（2013年10月6日）

Hは、積極的にミッション活動に取り組むことはキリスト者の当然な責任だと考えている。ほかの大部分の人と違って、信仰関連の見識が広いため、パク氏及びJCCのことをマクロな次元で取り扱っているように見受けられる。

そのようなHとは反対に、Kは日本滞在期間も信仰期間も長くない。彼女は洗礼を受けてから国際結婚で夫とともに来日し、現在一緒に英語礼拝の教会に通っている。子供が二人いて普段は子育てで暇がないにもかかわらず、子供を連れてJCCのイベントに参加したこともある。

キリスト者に使命があります。地の果てまで福音を述べ伝えるというのは、避けられない責任です。だからJCCの講座って内容が素晴らしいじゃないですか。私たちが地上でどうすればその責任を果たせるのか、後味が深いですよ。（2014年11月2日）

専業主婦である代わりに、Kはキリスト信仰関連の本を大量に読んでおり、ネットで有名な牧師の説教もよく聞いている。Kにとって、JCCが伝えている情報は、それまで蓄積してきた信仰に対する個人的な認識と一致している。彼女は、所属教会では必ずしもこのような説教がなされないわけではないが、良いものであれば繰り返して聞くのも悪いことではないと主張

している。逆に、むしろ子育てが忙しくてJCCの活動に多く参加できないことが彼女にとって最も残念なことであるという。

この二人は調査対象のなかでは少数であり、世の中でも多くはないかもしれない。しかし、まじめで敬虔なHとKにとって、JCCという存在の価値は、ミッション活動に消極的であるほかの教会よりずっと高い。一方、その敬虔さのゆえに、この二人が示した態度と思考は、JCCそのものへの評価というより、むしろまずはほかの教会への不評として捉えるべきであろう。

JCCに関わる一般参加者の中では、B、F、Jの3人はキリスト者の家庭出身、または幼少時から一般人より多くの信仰関連教育を受けたことがある。そのため、この3人はほかの人々と比べると、キリスト者としての自覚が強く、キリスト信仰を自身のライフスタイルに深く取り入れたように見受けられる。

Bは祖父の代から親族を含めて全員キリスト者である。そのため、幼少時からずっと地元の教会で、そこの子供のグループに入って遊んでいた。中高時代も変わりがなく、大学時代も学内のキリスト者のサークルに所属していた。来日後、同じくマレーシア出身者の紹介ですぐJCCのスタッフ会議に参加した。最初、マレーシアの教会での経験をみんなに紹介したことで高く評価された。だが約一年後、完全にスタッフ会議から離れて、ただイベント開催時に臨時スタッフとして手伝いに来るだけになった。本人は、JCCにどうしても関わり続けたいが、日本語学校の授業及びアルバイトで忙しくて、時間の調整が非常に難しいと説明してくれた。しかし、たまたま同じくマレーシア出身のBの親友の一人にこの件を言及したところ、その人はこう述べる。

日本語はまだ上手ではないから、教会とJCC以外では友達がいらないでしょう。けどJCCでは中国人が多いので、共通の話題がなくて全く混じれないから、仕方がないですよ。
(2015年6月4日)

これほど直接的な告白を本人がすることはとても考えられない。一方で、このような説明はBの現状に対して最も合理的な解釈を提供していることを認めざるを得ない。もしこれが事実だとすれば、Bにとって、前述したHによる批判のように、毎週の礼拝などだけでは到底満足できないであろう。Bは日本に来て過去と同じような信仰生活を求めているため、おそらくJCC以外の選択肢はないだろう。Bのように活発な活動に参加したいが、中国人との接触も避けたい、という考え方からすれば、スタッフ会議を離れてもJCCとの関わりをあきらめたくないという気持ちも理解できよう。

もう一人のFもマレーシアの出身である。ただしFはだいぶ前から家族全員で日本に移住してきたところがBと違う。Bが直面している問題は、Fにとって全くないと言ってもよい。それでも、FはJCCの伝道大会及び音楽伝道会に参加した後、時々このような感想を述べる。

ペナンに住んでいた頃、福音堂にいました。毎年、合同の伝道大会がありましたよ。教会堂だけじゃ狭いからいつも広場で行ってましたよ。（2014年5月17日）

また、クリスマスに近づいた時、雑談の間にこう述べる。

マレーシアでは、私たちはいつもこの時期から街に出て「キャロリング」に行くんですよ。（2013年12月3日）

「福音堂」は、マレーシアのペナンにある最も古い教会の一つである。「キャロリング」とは、クリスマスの前に街頭で賛美歌を歌うという、キリスト教的背景を有する社会によくあるイベントであるが、日本では街頭に出るケースは稀である。即ちFは、Bと同じく日本における信仰生活に対して、ある程度の不満や遺憾の感情を覚えている。Fの場合、無自覚にも日本のプロテスタンティズムにないものを用いて対比させるという行為の中に、自身の感情を内包させたように読み取れる。

他方、Jは台湾の出身であり、Bと似たような経験が多かった。中学校時代から教会に通って洗礼を受けたが、教会内のグループ活動にとどまらず、中高時代から青少年伝道で有名なミッション系出版社「校園書房」の学生サークルに参加していた。さらにそこからボーイスカウトにも参加し、いろいろ活躍していて表彰を受けたこともある。特にJはまだ20過ぎの大学生だが、極めて冷静な自己分析能力を持っている。

昔は自宅、学校、塾、キリスト者のサークルというセットを順番で回って一日を過ごしたわけです。いま日本の大学に入ったが、塾を学内のサークルに変えましたし、JCCにもよく顔を出していますから、社会人になるまでこんな感じで行こうと思います。（2015年9月16日）

自信満々のように聞こえてきた人生計画だが、少なくともJにとって、JCCの役割は中高時代のキリスト者学生のサークルと同じように認識されている。ただし、Jは学生サークルやボーイスカウトにいた頃のようにJCCの活動に積極的に取り組んでいない。

中にはすごい人たちがいますから、私は簡単な手伝いさえできればいいと思います。みんな楽しんでやっていけそうで追い出される心配もないでしょう。(2015年9月16日)

以上の3人は、来日する前からすでに信仰生活の習慣を身に付けている。JCC とのかかわりを巡って、彼らは直感的に行動しているわけではなく、また長期にわたって積み上げてきた知識や経験をもとに判断しているわけでもない。彼らは日本に来て改めて自身の居場所を作る際、信仰生活も当然ながら一定の割合を占めているが、かつての環境と日本とりわけ JCC が提供しているものとのギャップを強く意識した。無論、3人はそれぞれ程度の違うギャップに直面している。Bにとって、ギャップを我慢しなければ信仰生活の場そのものを失うリスクを感じ取っているだろう。Fは一応落ち着いたように見えるが、無意識のうちにギャップに不満な感情を抱えている。Jはある程度、最初からギャップの存在を意識したうえ、それと向き合おうとする姿勢を示した。しかし今後、JはBやFのような局面になるか、それともギャップを解消させることができるのか、いまだ未知ではある。

いずれにせよ、この11人に対するインタビュー調査の結果からわかるように、様々な個人的経験を持つ華人キリスト者たちにとって、普段各自の所属教会では満たされないと思われるものを JCC の活動が提供してくれた。ひよんな機会や曖昧な主観的感情による動機が一番多く見えるが、ここでは注目すべきなのはむしろ信仰にまじめな態度をとる人と信仰経験の多い人のことである。本稿の冒頭で述べたように、日本の華人キリスト者の社会は東南アジアや北米などの伝統的な集中地域とは比べられないほど小さく、かつ教会組織の孤立化が顕著である。この2種類の華人キリスト者にとって、このような環境は決して理想的な状態ではないが、それを変えるための力はなかった。JCC の登場はマイノリティに相当するような彼らにとっては救いであったかもしれない。一方、彼らの欲求は日本以外の華人キリスト者の世界では普通のように捉えられている側面がある。即ち、JCC は単に日本の華人キリスト者の中のマイノリティ的な一部の人々を満足させただけでなく、これまで日本にはなかった世界的な「基準」をもたらしたとも解釈できよう。無論、積極的にミッション活動を推進しているのは JCC だけではない。しかし多くの人々は宣教師や教会指導者たちのように専門的な知識がないため、プロテスタンティズムの世界ミッションについて漠然とした印象しか持たない。たとえ自身が所属する個別の教会組織が行ったミッション活動に参加するとしても、一コミュニティの行事のレベルをはるかに超えたという活動の意義を認識できるとは言い難い。そこでは、もし人々は JCC の活動を通じて世界的な「基準」を認識すれば、自分たちが取り組む活動に普遍的な意義を見出し、プロテスタンティズム世界の一員であることを実感できる可能性が大きい。個々の個人への影響より、「キリスト者」という名目ではなく実践の中から連帯感を生み出すことこそ JCC がもたらした最大の影響と言えよう。

他方、一定の支持者を得られた JCC が、ほかの華人キリスト者の教会組織などから拒絶さ

れたことも無視できない。特に教会指導者たちの場合、間違いなく一般人と違う論理が裏付けられている。次の章では、彼らの視点を中心に引き続き JCC の役割と影響を考察していく。

5 JCC とほかの華人教会組織との関係

JCC のコアメンバーを除く一般参加者たちは、各自の動機に基づき、JCC の活動を多様な視点から肯定的に捉えていると言えよう。しかし前述したように、JCC の動員力は約200人である。今後それがさらに拡大する可能性はあるが、一般人である彼らの支持はあくまで JCC の一側面でしかない。既存のコミュニティとりわけ各教会組織の指導者たちの視点も極めて重要である。本章では、この視点について調査した結果を取り上げて分析する。

前述したように、パク氏は JCC の活動をはじめようとした時、ほかの華人教会指導者に協力を求めても結局支持を得られなかった。この点はパク氏本人だけでなく、コアメンバーたちを含めて、JCC の中ではよく言及されている話題の一つと見受けられるが、具体的な経緯については明らかにされていない。一方、JCC との関係または JCC の活動に対する見解について、関東地方にある24の教会²⁴の華人教会指導者たちに個別に問い合わせをしてみたところ、それらの大半は沈黙または「よく知らない」という一言で回答を拒否した。それら以外では、JCC の活動に理解を寄せつつも、具体的な支持や連携の行動をしておらず、JCC のビジョンを尊重するために見解の表明を控えているというような返事がほとんどだった。

このような沈黙と建前に終始する返事しかない状況は、JCC が置かれた環境をある程度まで表したと考えてよいだろう。また、前章で取り上げた一部のインタビュー調査では、自身の所属教会が JCC のように積極的なミッション活動に取り組まないことへの不満があるように見受けられたため、ミッション活動への取り組みを原因の一つとして捉えられるかもしれない。ただし、Mori (2014) によれば、JCC 以前の約二十年間、すでにミッション活動への取り組みを巡って消極的な「エスニック志向」の教会と積極的な「ミッション志向」の教会が存在している。JCC と距離を置いた教会組織の中、当然ながら積極的にミッション活動に取り組む教会もある。自分たちのコミュニティ以外のことに興味がなく、JCC への拒絶が明確だった指導者たちより、すでに日本の華人社会を対象にミッション活動を展開している先行者たちがどのように JCC を捉えたのか、という視点が JCC の問題点をより有効に見出せると考えられる。そのため、筆者が改めて数度の交渉を経て数人の宣教師でもある教会指導者にインタビュー調査を行ったが、本稿の問題意識及び調査の方向は基本 Mori (2014) を踏まえたうえで行われたため、ここではスペースの制約もあり国際福音教団の指導者である L 牧師だけを事例に取り上げる。

L 牧師は男性の60代の台湾系アメリカ人である。かつて工学博士出身の専門職であったが、30代半ばから神学校に入って宣教師に志願した。2004年より来日後、最初は日本人への伝道活

動に取り組もうとしたが、次第にビジョンが変わり、日本の神学校などと協力して華僑華人向けの伝道活動に方向転換した。JCCが登場する前、Lはすでに関東地方で複数の教会を設立し、かつ華人系出身の伝道助手の養成にも取り組むようになった。華人キリスト者が集まる教会の指導者たちの中では、積極的にミッション活動を展開しているほうに分類できる。一方、ミッション活動に対する積極的な態度により、東京国際基督教会や「華福運動日本区委員会」に対して、非信者への伝道というキリスト者としての重大ならない責任を放棄しているとしばしば批判している。

Lへの正式なインタビュー調査は2013年、2014年、2015年にそれぞれ1回行われたため、JCCへの態度及び行動の変化という貴重な観察結果が得られた。最初の調査は2013年6月、JCC最初の大規模伝道イベントが開かれた約1か月後で行われた。JCCのことについて聞かれると、Lはまず神学的立場の相違を強調した。

JCCのことですが、どこから話せばいいでしょう。私の立場はあなたも知っているでしょうが、ウエストミンスター神学校²⁵は正統的な改革派神学校ですから、私たちには必ず守るべき信仰宣言などいくつかの文書があります。あの牧師はどこの神学校の出身なのか聞いていませんが、改革派ではないでしょう。本当に真理を語れるかどうか、私にはわかりませんね。昨年彼らが私のところに尋ねてくれたことがあります。開会の祈りをしてほしいとのことですが、私は承諾してあげませんでした。真理に関わることは軽い態度で取り扱ってはいけませんよ。

その後、筆者がその伝道集会が『REVIVAL JAPAN』に報道された件²⁶について意見を求めたが、Lは批判的な意見を述べた。

やり方が古くて固いですよ。日本の風土にはそんなやり方じゃ通用しません。会場の使用は有料ですし、人々を集めてみんなでわいわいしていたらもう主に感動されました！リバイバルだ！と叫んだ後、帰宅したらもう効果が残っていませんよ。確かに二百数人が信仰を受け入れるとその場で表明しましたっけ？二百人ですよ。キリストを信じるとその場で宣言したとしても、今はどこにいますか？それからちゃんと教会に通っていますか？そんなに多かったら、みんなどこに行ったのか彼らに聞いたことがあります。全部恵比寿²⁷に行ったと言ってくれました。恵比寿でも合計三百人でしょう？それ以上人が増えていないではありませんか？結局本当に伝道と言えたでしょうか？彼ら自身が一番わかるはずですよ。少なくとも私は彼らに構う暇はありませんよ。

2013年時点のLはJCCに対して否定的・批判的な態度を取っていた。まず神学的立場を強

調することは、本人にとって最重要な意義がある。しかし、統一された神学的解釈が存在しないことがプロテスタンティズムの特徴でもあるため、神学的立場の相違が協力や連携を拒絶するための理由としては反論できないため、そこから具体的な分析を展開するには無理がある。一方、Lは伝道集会というミッション活動の実践方法を取り上げて批判し、かつ結果報告の偽装疑惑を指摘したことから、パク氏とJCCの活動がほかの華人教会指導者たちから支持されないことは、一方的・恣意的な行為ばかりではないことと言えよう。

Lへの2回目のインタビュー調査は2014年の7月に行われた。その前、2014年5月にJCCの2回目の伝道集会が行われた。今回、Lは再びJCCから招かれたが、彼は拒否せず伝道集会に参加し、しかも開会の祈りを担当した。なぜこのように態度を変えたのかという筆者からの質問に対して、Lはこう答えた。

昨年伝道集会で来日した講演者のメッセージに神学的にややこしい点がありましたが、今回の講演者の神学は大丈夫ですから。なお今回のテーマは自然科学とキリスト信仰との関係だから²⁸、そこがどうしてもわからないせいで信仰を拒絶するような華人が一番多いですよ。この機会ですっかり聞いてほしかったですね。

Lは、自身の態度の変化についてこれ以上語ってくれなかった。ただ動機としては、2013年のJCCに関わりたくない理由との間に、神学的立場の強調という点が一貫している。なお、今回のテーマが華人にとって有益なものであるという評価に対して、伝道集会への参加について自身が設立した教会の会衆を動員したかどうかを聞いたところ、その回答は否定であった。

会衆に対して私が出席することを知らせたが、参加を呼びかけたことはありません。真理への認識を日々深めていくことができれば、わざわざそのようなイベントに参加する必要はありません。

さらに2015年の3回目のインタビュー調査の際、JCCのことについてLは全く無関心な態度を示した。前回の調査から約一年強の間に、LはJCCの合同祈祷会に招かれて、2回も行って説教を担当した。しかし説教を担当すること以外、依然JCCとの間に挨拶以上の関係性がなく、逆に筆者がJCCについての調査を継続していることを知り、そこまで調査する価値があるのかと聞いた。一方、Lは2015年に入ってから新しい求道者のグループの運営及び聖書翻訳関連の業務に取り組んでおり、それらの価値はJCCより大きいために専念しなければならないと述べてくれた。

結果から言えば、JCCに対して、Lは否定から「部分的に評価する」ことを経て、特別な関心を払わないというような態度を取るようになってきた。おそらく、積極的にミッション活

動に取り組む宣教師として、LはJCCのビジョンそのものに反対するようなことはないだろう。しかし具体的な手法の相違は、両者間の対立関係を誘発することがないにもかかわらず、協力関係の形成を阻害する原因になっている。そこでは、たとえ同じくキリスト教ミッションの推進者であるとしても、相互間の連携関係はそう簡単に成立できるようなものではないように伺える。前章で紹介した一般参加者たちがJCCの活動において、自身が求めるような目的を見出そうとしたが、Lは逆にミッション活動を実践する専門家として、実践の手法または経路を重視するというような態度を見せた。言い換えれば、JCCが拒絶された件について、華人教会指導者側にもJCC側にも、それぞれの都合や運営の習慣による責任があると見受けられる。

なお今回は特に触れられていないが、Lはいわゆる「エスニック志向」のコミュニティ運営とは明確に一線を画している。第3章で述べたような、パク氏のエスニシティ重視の考え方に対して、Lは特に意見を示さなかったが、実際反感を抱く可能性は否定できない。ただし、それでもLは国際福音教団の会衆たちがJCCに関わることを禁じようとしなかった。ミッション活動への取り組みという点が容認という判断の主因になったとすれば、即ちJCCが一般の華人キリスト者間でさらに影響を拡大していき、いつか関東全域ないし日本全国の華人キリスト者を「ミッション活動の実践」という文脈に巻き込むという可能性も十分考えられる。

6 考察

本稿では冒頭の「問題の所在」で、従来の華人社会の宗教研究における「チャイニーズネス」を自明視する傾向が「華人キリスト者」への認識を深める努力を妨げること、また、日本の事例においてはプロテスタンティズムの受容におけるホスト社会の影響を度外視できることを指摘して、華人キリスト者という存在を巡る今まで類例のなかった新たな記述、及びその研究意義の析出を試みた。ここでは冒頭に立ち戻り、「華人キリスト者」研究の特徴を再確認したい。

華人社会における諸宗教を巡る研究においては、中国発祥のものや漢民族の文化的伝統に依拠するものを事例に取り上げて、「チャイニーズネス」の増減を軸にエスニシティの検討を目指すという問題設定が主流である。しかし歴史的に見ればプロテスタンティズムはその枠組みに収まらず、さらに20世紀半ば以降には、中国のキリスト者とも異なる「華人キリスト者」独自の文脈が形成され始めた。この特徴を意識した研究は「チャイニーズネス」ではなく、キリスト教ミッションへの取り組みに焦点を当てるようになった。このような焦点化を行う研究が蓄積されれば、従来のような「チャイニーズネス」に基づく華人研究のパラダイムの再考にもつながる可能性がある。

そのような視点を踏まえ、本稿では近年日本の華人キリスト者間で展開され始めたミッション活動関連の動向に注目した。先行研究を参照して、日本では、積極的にミッション活動に取り組む華人キリスト者のコミュニティが少数存在するとはいえ、多くの教会すなわち華人

キリスト者コミュニティの孤立化が顕著であることを確認した。そのうえで本稿が取り上げた事例は、2012年からスタートした超教會的ミッション団体の「JCC」である。JCCは非信者への伝道と、華人キリスト者を伝道活動に参加させるための動員を中心に積極的に活動している。そこに集まる華人キリスト者たちの動機は様々だが、JCCが各自の所属教会では満たされないものを提供できているために、高い支持をえていることがうかがえる。一方、JCC以外の華人教会指導者たちは、ほとんどがJCCと一定の距離を置いていることが今回検討した事例からも読み取れる。ここでは十分にふれられなかったが、ミッション活動に限って容認するという動向が観察されている。そこで、本稿を締めくくるにあたって、JCCは創設者である韓国人牧師の個人的都合によって、その展開が一定の程度にとどまる可能性はあるとはいえ、彼が「ミッション活動への取り組み」を巡る世界的な「基準」とも言えるような意識を、種を蒔くように日本の華人キリスト者たちの間にもたらした、という大胆な予測をしてみたい²⁹。もしこの予測が幾分かでも真実であれば、本稿が一端を提示した約三年間の調査の結果だけでなく、今後の展開を緻密に追うことも華人キリスト者研究において意義があると考えられる。

上記の諸事実は、たとえホスト社会との交渉の必要性がなくても、華人キリスト者たちが積極的にミッション活動に取り組む動機があることを示している。日本社会における華人キリスト者の文脈からくる制約があるが、華人キリスト者によってJCCのような「ミッション活動への取り組みに基づく場」の必要性が認められていることに間違いはない。従来の華人研究が陰に陽に「チャイニーズネス」を軸としているという理解があたっているとすれば、華人キリスト者を理解するには「華人社会の伝統宗教」への研究が暗黙に前提としているような本質の顕現といった視点ではなく、ミッション活動の実践行為の中に発現し主体自身に反射してゆくという、非本質主義的な主体形成の過程を観察・記述しなければならない。当然ながら、「華人キリスト者」の主体の所在が「華人」ではなく「キリスト者」のほうにあるなら、非本質主義的な主体を形成した「華人キリスト者」は、自身が有する「チャイニーズネス」のような本質主義的な部分を相対化したり、再解釈したりするような研究方向も自然に注目を集められると予想できる。特に従来の華人研究では、「華人」というカテゴリーは常に当事者の意志とは関係なく、生物学的・文化的本質主義の前提に基づいて構築されたが、当事者の意志を様々な行動から析出できれば、間違いなく華人研究が刷新されることになる。そのため、ミッション活動への取り組みを考察することはただ「華人キリスト者」というカテゴリーに適合した手法だけでなく、そこから非本質主義的な主体形成を巡る見識を析出することは、今後の華人研究に新たな可能性をもたらすことになる。

註

- 1 門永（2013）を参照。
- 2 本稿が取り上げる仏教の範疇は、中国社会に定着した「漢伝仏教」のことを指す。

- 3 本稿における「Chineseness」について、陳(1999)、涂(2007)を参照。
- 4 歴史関連の整理について、蘇(2010)、李(2002)、朱(2009)、モリ(2012)などを参照。
- 5 邢(2004:225)と邓(2005:8)では、それぞれ香港とマレーシアの華人キリスト者が歴史記録の保存を重視しないことを指摘しているが、筆者の調査の経験から言えば、これはほかの地域の華人キリスト者の間にもよく見られる特徴である。
- 6 後続の研究として、Yang(2002)は華人キリスト者である個人が教会だけでなく、様々なミッション団体とも絡み、非信者への直接的な伝道活動から神学生や宣教師たちへの支援まで、積極的にトランスナショナルなミッション活動に関与していることを記述している。
- 7 Shih(2010)によれば、これまでの華人研究において、「華人」というカテゴリーの定義は、当事者の意志とは関係なく、中国に出自を持つ人であればすべて包括するようになっている。それで、一人が中国との関連性即ち「チャイニーズネス」をどれくらい持っているのか、ということへの考察が華人研究の目的になっている。Shihはこの現状即ち華人研究が本質主義的な前提を内包することを強く批判しており、たとえ中国に出自を持つという事実があるとしても、長い年月を経て、すべての人々は移住先の社会と融合し、「華人」ないし「中国人」からほかの「○○人」に変わる権利があるはずだと主張している。そのような変化は、「中国」ないし「中華的なもの」とは違う文脈から獲得した経験に基づくことになる。
- 8 Shih(2010)によれば、例えばアメリカの華人二世以降の人々が民権運動に参加することが、移民一世からは投機的な行為として批判される。
- 9 成瀬(2005)とMori(2014)及び本稿を執筆するための調査から見れば、華人教会のほとんどは会堂の建設や日常の管理(ごみの回収など)以外、個々のコミュニティとして日本社会との接点が極めて少ない。たとえ積極的にミッション活動に取り組む集まりでも、神学的立場が近い一部の日本の教会との付き合い以外、韓国系プロテスタント教会のように日本社会から広く認知されることはない。
- 10 『華福宣教祈祷手冊』171ページを参照。
- 11 日本の華人キリスト者のコミュニティの情報整理について、『クリスチャン新聞』(2007年3月18日付)と『人の移動事典』の付録にもあったが、近年増減や変動が多いため、本稿では東京国際基督教会元主任牧師の姜寶陞牧師及び大阪中華長老教会より提供された情報に基づき、筆者が個別に連絡を取って確かめたものである。
- 12 淀橋教会の創設は1904年であり、福岡新生キリスト教会の創設は1968年である。
- 13 その前身は1865年に創設された、かつて中国における最大規模のミッション団体「中国内地会(China Island Mission)」である。1953年まで中国から完全に撤退した後、本部をシンガポールに置き、1965年より現在の名称に改めた。アジア中心で活動する代表的なミッション団体である。
- 14 複数の教会をまとめて運営するのは基督教国際福音教団と日本華僑基督教団である。前者は台

- 湾系アメリカ人宣教師が首都圏在住の華人系ニューカマーを主要な対象として、後者は台湾系移民2世の医師が中国人研修生や学生などを主要な対象として、それぞれ設立したのである。
- 15 台湾基督長老教会と日本基督教団との協定により、台湾長老派の教会は独自の宗教法人資格を申請する際、日本基督教団の協力が得られるため、教会組織が安定的に拡大できる。一方、後述のようにほかの華人教会の一部は海外との繋がりがあがるが、日本社会との接点が少なく、プロテスタンティズムの内部においても韓国系やブラジル系のように広く認知されていない。
 - 16 「世界華人福音運動」は、20世紀後半の福音主義の流れを代表する「ローザンヌ運動」の支流としてスタートしたのだが、今日ではすでに世界規模の福音主義宣教運動を構成する重要な一部になっている。その影響により、主に東南アジアと北米を中心とする華人キリスト者の世界では、多くの専門的なミッション団体が現れ、多くの教会組織も積極的に宣教師を派遣するようになっていく。彼らは「ローザンヌ運動」の思想及び英米教会の経験を参照しつつ、積極的に多様なミッション活動に取り組んでいる。そのような努力は欧米の福音主義関係者からも認められている。詳細は〔林, 1990〕と〔モリ, 2012〕を参照。
 - 17 「世界華人福音運動」は献金と出版物の販売から収入を得ている。その中でも教会組織による定期献金や、華人キリスト者の中の実業家たちの多額な個人献金が高い割合を占めている。
 - 18 「世界華人福音運動」5代目の総幹事である李秀全牧師（Rev. Morley Lee）へのインタビュー調査による。李によると、かつて大型のイベントの際、集金が困難になった場合、最後は大抵丁氏が不足分を調達してくれた。一方、李は総幹事として定期的に世界中の華人関連教会を巡回しなければならないため、2007年以降も毎年東京国際基督教会に訪問する。ただし非信者への伝道集会の企画などを巡って、「華福日本区委員会」との間に一度も合意したことがないという。2011年12月14日、香港にて。
 - 19 本章の内容はすべてパク氏へのインタビュー調査による。時間は2013年9月13日、同12月3日、2014年4月20日、同12月10日、2015年4月26日、いずれ東京にて。
 - 20 パク氏の語りでは、「華人」を「中国人」の同義語として使われる傾向が強く、なお「在日」という言葉の使用も極めて多い。JCCの日本語名称も「在日華人クリスチャンセンター」と訳されている。のちに参加者の中から、「在日韓国人」との混同などを理由に反対する声が出たため、銀行の口座名義が「ニホンカジンクリスチャンセンター」になっている。それが後日宗教法人登録の際の正式な名称になると予想される。ただし、公式サイト日本語版は未修正のままである。なおサイト内では「華人」と「中国人」の使い分けの基準が見当たらない。一方、「華人」について世代や出身などとは関係なく一律に中国社会の延長と見なすような認識を、パク氏は頑固に持っている。2013年12月3日、筆者が東京日暮里国際教会に尋ねて2回目の個人インタビュー調査を行った際、自身が「華人キリスト者」を対象として研究している内容を詳しく説明した。そこでパク氏は「あなたの研究に中国大陸という部分が欠けている」とコメントしてくれた。筆者は、現代中国語における「華人」という言葉の第一義は「Chinese

- Overseas」を指すと説明したが、「それはあなたたち学術上の考え方ですね」という返事で、この話題を打ち止められた。
- 21 JCC への調査を始めてから、コアメンバーを含む数人の協力者より情報を提供されている。この表は2015年9月21日を持って協力者たちに確認してもらった内容である。
- 22 池上(2006:281-282)を参照。
- 23 中国の主要なチャットアプリの一つである。
- 24 本稿第2章を参照。
- 25 20世紀前期、リベラリズムの神学に対抗するため、ウエストミンスター神学校がファンダメンタリズムの重要な拠点として創設された。今日においても保守的・排他的な神学の立場で知られている。L氏はあらゆる人に対して、普段からよくこの点を強調している。
- 26 2013年のJCCの伝道大会は、日本の福音派伝道用雑誌『REVIVAL JAPAN』2013年第16号6~7ページにて、「日本で中国人が救われる：華人伝道集会で決心者241名」というタイトルで報道された。
- 27 「恵比寿教会」の略である。東京国際基督教会は恵比寿駅の近くにあるため、関東の華人キリスト者の間ではよく「恵比寿教会」と呼ばれている。
- 28 JCCの2014年春期伝道大会の講演者である馮秉誠牧師は、1987年ミシガン州立大学より生物学博士号を取得した後、1997年の神学校入学までの10年間はいくつかの大学で基礎医学関連の研究活動に従事していた。大衆伝道者として、主にキリスト信仰と自然科学との関係を巡って論述・説教することが有名である。
- 29 「ローザンヌ運動」を代表とする、今日のプロテスタンティズムの世界ミッションを巡る問題意識を指す。本稿の注16を参照。

参考文献

(日本語)

- 池上良正『近代日本の民衆キリスト教—初期ホーリネスの宗教学的的研究』東北大学出版会(2006)
- 王維『日本華僑における伝統の再編とエスニシティ』風響社(2001)
- 張玉玲「横浜華僑の文化復興運動とエスニック・バウンダリーの再定位—横浜関帝廟の再建および関帝誕の創出を通して—」『華僑華人研究』Vol.1:115-139 日本華僑華人学会(2004)
- 成瀬千枝子「大阪における華人キリスト教会の変遷—在日華人クリスチアンの組織活動とエスニック・アイデンティティ、下位エスニック・アイデンティティ」『移民研究年報』Vol.11:119-135(2005)
- モリ カイネイ「『華人系プロテスタント教会』研究の手掛り—『世界華人福音運動』を通して」『アジア・キリスト教・多元性』Vol.10:19-36 近代キリスト教思想研究会(2012)
- 門永美保「戦後の日本における華僑華人の研究史」『現代社会研究科論集：京都女子大学大学院現

代社会研究科紀要』Vol.7：73-82 京都女子大学（2013）

(中国語)

- 陳奕麟「解構中國性：論族群意識作為文化作為認同之曖昧不明」『台灣社會研究季刊』Vol.33：103-131 臺灣社會研究季刊社（1999）
- 邓雅荣編『福临禾场』马来西亚基督徒写作团契（2005）
- 林来慰『華福運動縱橫談』世界華人福音事工聯絡中心（1990）
- 李榭熙「19世纪中期（1835-1860）华人浸信会教民的曼谷—香港—潮州跨国网络」『东南学术』Vol.24：193-227（2002）
- 世界華人福音事工聯絡中心編『世界華福宣教祈祷手冊』世界華人福音事工聯絡中心（2010）
- 蘇精『基督教與新加坡華人1819-1846』國立清華大學出版社（2010）
- 涂經詒「略論「中國性」問題研究的歷史與現狀」『臺灣東亞文明研究學刊』Vol.7：153-164（2007）
- 邢福增『香港基督教史研究導論』建道神學院（2004）
- 朱峰『基督教与海外华人的文化适应——近代东南亚华人移民社区的个案研究』中华书局（2009）

(英語)

- Mori, Kainei "Overseas Chinese Protestant Churches in Japan: Changes as witnessed from their Stance toward Christian Mission Activities" "After Migration and Religious Affiliation: Religions, Chinese Identities and Transnational Networks" Singapore: World Scientific pp.241-272 (2014)
- Shen, Qilan "Between Transnational Mission and Migration Life: Formation and Diversity of an Evangelical Chinese Community in Germany" University of Münster (2010)
- Shih, Shu-mei "Against Diaspora: The Sinophone as Places of Cultural Production" in Tsu, Jing and Wang, Dived Der-wei(eds.) Global Chinese Literature: Critical Essays, Leiden: Brill Academic Pub, pp.29-48 (2010)
- Yang, Fenggang Chinese Christians in America: Conversion, Assimilation, and Adhesive Identities, University Park: Pennsylvania State University Press. (1999)
- Yang, Fenggang "Chinese Christians Transnationalism: Diverse Network of a Houston Church" in Ebaugh, Helen Rose & Chafetz, Janet Saltzman Religion Across Borders: Transnational Immigrant Networks, Walnut Creek: AltaMira Press. (2002)

※本稿の一部に、2013年度の国立民族学博物館特別共同利用研究員の受入期間中の研究成果が含まれている。

A Case Study Of Chinese Overseas Christians in Japan about their Parachurch Mission

Albertus-Thomas MORI*

Abstract

This paper endeavors to research Chinese Christians in Japan, looking at, in particular, the missionary activities in recent years of the JCC, a parachurch organization. Prior research on religion in immigrant Chinese society treated as self-evident the issue of changing Chineseness and ethnic mores; this paper, however, indicates how that approach is not compatible with Protestantism and discusses the way in which people are actively engaging in missionary activities; in so doing, it attempts to reconsider the existing Chineseness-centered prior research. Specially, after considering past work on the subject, this paper establishes that churches at which Chinese immigrants in Japan congregate are increasingly isolated from each other. At the same time, it points out the activities of the JCC, a parachurch organization active since 2012, with inquiries made into the nature of those activities, the structure of the organization, the critical mindset of the founders, member motivations and opinions, and opinions of leaders of other Chinese churches that distance themselves from the JCC. The research found that the JCC introduces a new worldview surrounding global Protestant missionary activities to Chinese Christians in Japan and has them implement these missionary activities themselves, thereby causing them to understand the JCC's goals. These experiences form the basis for the formation in Chinese Christians of a non-essentialist autonomy. For these reasons, research into Chinese Christians represents not only a new sub-genre, but work with the potential to revitalize the actual paradigms surrounding research into Chinese Overseas.

Keyword

Chinese Overseas, Protestantism, Mission, Parachurch Organization, Chineseness

* Correspondence to: Albertus-Thomas MORI
Graduate School of Core Ethics and Frontier Sciences, Ritsumeikan University
E-mail: sealand196792@gmail.com